



タンチョウ博士のお話（第26回）

○タンチョウはワングエル部員ですか？

長沼町にも、高校や大学のワングエル部で活躍した方がおられるでしょう。ワングエル部の正式名はヴァンダーフォーゲル部で、もともとはドイツ語ですが、「ヴ」がなじみのない発音なので、日本人は「ワ」と言っています。ワンダーは旅をする、放浪するなどの意で、フォーゲルは鳥のことですから、ヴァンダーフォーゲルは旅する鳥、つまりドイツ語で渡り鳥のことです。

さて、渡り鳥とは、季節により、異なる地域へ長い距離を移動する鳥のこと、と物の本にあります。

では、質問です。タンチョウは渡り鳥ですか？

正解は、「はい・いいえ」の両方です。

国境のアムール川（黒竜江）を挟み、ロシアと中国でもタンチョウは繁殖し、餌の得にくい冬は、直線で1,000 km（稚内ー東京間）から2,000 km離れた中国南東部海岸や、韓国と北朝鮮の境の非武装地帯で暮らします。

では、舞鶴遊水地のタンチョウはどうでしょう。春ー秋は長沼町で繁殖し、冬は、川で餌のとれる日高へ行って暮らします。つまり、1年の暮らし方は同じなのに、大陸のは渡り鳥で、長沼のは「留鳥」と呼びます。

その仕分けは、地域が異なるのと、長い距離の移動にかかっています。けれど、地域をどのように分けるか、長いとはどれほどの長さか、明確な決まりはありません。なので、白神岬（北海道）ー竜飛岬（青森県）間約20 kmを移動して渡り鳥、稚内から函館間約400 kmを移動しても留鳥ということになりかねません。

しかし、ワングエルを「放浪する鳥」と呼べば、自立後数年間、タンチョウの若者はまさにあちこち放浪します。しかし、成鳥になると一定の繁殖地と越冬地を持ち、以後その間を往復するようになります。

昨年遊水地で育ったタンチョウの子も、自立後、4月半ばに石狩の当別町や月形町で仲間と一緒にいて（図1）、5月に舞鶴遊水地へちょっと顔を見せ、すぐどこかへ去りました。若鳥は今後も放浪を続けるでしょうが、実はこれが「婚活」の一部でもあるのです。

こうして様々な環境で、様々な経験をして若鳥は成長します。私たち人も同じで、コロナ禍でワングエルの機会が狭められ、広い世界に触れにくくなった若者たちの心の成長が、気がかりです。（文：正富宏之）



図1. 今年4月に石狩当別町で見つかったタンチョウ2羽（翼を広げた右の個体が、昨年舞鶴遊水地で育った若鳥）（撮影：正富宏之）

■講演のお知らせ：第1回長沼タンチョウ・ガイド養成講座■

「タンチョウ博士のお話」執筆者の正富宏之先生（専修大学北海道短期大学名誉教授）をはじめとした専門家による講演会を、町内で開催予定ですのでぜひご参加ください。詳しくは、広報ながぬま7月号に掲載します。
〔日 時〕7月31日(土) 13時～17時 〔会 場〕ながぬまホワイトベース

【問合せ先】役場企画政策係（☎ 76-8015）